

2021年6月8日
原子力安全部会フォローアップセミナー
継続的安全性向上：ステークホルダーの意義と役割

社会の視点からの継続的安全性向上

勝田 忠広
明治大学

1. 背景と目的
2. 現状と課題
3. 結論

1. 背景と目的

- 2020年8月
 - 原子力規制委員会「継続的な安全性向上に関する検討チーム」開始
- 現在
 - 規制委員会委員長や規制庁長官を筆頭にして、社会科学の専門家を中心にした規制の新たな視点を模索中
- 今回、福島第一原発事故から10年目の節目を踏まえ、目指すべき市民社会の視点からその意義を求める

2. 現状と課題 (1/3)

- **継続的な安全性向上の社会的意義は大きい**

- 事故を引き起こして以降、原子力政策について十分な議論をせず、なし崩し的に進む日本社会にとっても避けてはいけない課題
- しかし「推進か脱原発か」といった分かりやすい議論ではないため不明瞭
 - 何を目的としているのか？
 - なぜ向上を目指さないといけないのか、なぜ社会はそれを求めないといけないのか、そもそも安全なら良いのか
 - 社会内部において、丁寧な合意形成過程が必要

- **社会的意義が大きいなら、社会的責任の所在も自覚せざるを得ない**

- では誰に責任が？
 - 原子力発電を所有する事業者や日本政府に
 - しかし原子力政策を積極的もしくは消極的に許容した日本社会にとっても、継続的安全性向上を支持するのかどうかを判断する責任が存在

2. 現状と課題 (2/3)

- **しかしながら、社会的動機があるようには見えない**
 - 仮にあったとしても、決して積極的なものではない
 - 社会的にも経済的にも閉塞し疲弊し、先進国としてソフトランディングを模索すべき時代において、これ以上の社会的負担を与えて欲しくないという消極的な継続的安全性向上
 - 一方、社会的責任から逃れるための動機や、当事者意識が欠如した状態で絶対的安全を求める社会的要請は存在
- **以上の視点からみれば...**
 - 日本社会には、継続的安全性向上に対する主体的で積極的な関与が求められていることになる

2. 現状と課題 (3/3)

- **この10年間で原子力規制委員会の継続的安全性向上の実効性はあった**
 - 一方、経済産業省や文部科学省、内閣府原子力委員会による効果は見えない
 - 安全であればよいだろうといった短絡的思考、原子力規制委員会に丸投げをすればよいだろうといった彼らの無責任体質の姿勢を、社会は無意識ながらに感じているように見える
- **社会的信用を得ないままの継続的安全性向上の取り組みは – 動機、目的意識を失った結果 – いずれ形骸化し、安全性向上どころかその低下を促進する**
- **今後検討すべきこと**
 - 原子力に依存すべき、というその政策の科学的根拠や、原子力産業の維持をサポートしないといけない、というその経済的・社会的根拠について、社会が求める体制づくり
- **原子力を無批判に推進させるためだけの継続的安全性向上ではいけない**

4. 結論

- 継続的な安全性向上に関する検討チームは、予想を超えて、聖域のない試みを行っている
- しかし、原子力業界はその結論を待つことなく、社会的にはもちろん、経済的な自身の影響力低下を真摯に受け止め、逃げることなく社会と対峙しないといけない
- **推進であれ反対であれ、社会的価値がない限り、市民社会は動かない**